

県最優秀3人 喜びの声

作文コンクール

第75回全国小・中学校作文コンクールの県審査が行われ、小学校低学年、同高学年、中学校の3部門から最優秀賞1点、優秀賞2点、佳作7点がそれぞれ選ばれた。最優秀賞作品は、全国から集められた作文による中央審査に進んだ。受賞者の喜びの声と作文要約を掲載する。

(優秀賞作品の要約、佳作受賞者は後日掲載します)

主催＝読売新聞社
後援＝文部科学省ほか
協賛＝JR東日本、JR東海、JR西日本、日本テレビ放送網、日本書芸院、光村印刷
協力＝三菱鉛筆



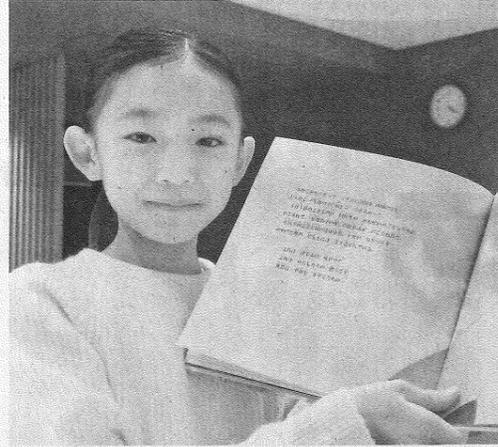
森尾由美さんら草加PR 宣伝隊長3人「イメージアップに」

草加市は、同市の魅力を発信する「そうか宣伝隊長」に女優の森尾由美さん(59)とタレントの志田音々さん(27)、リオデジャネイロ五輪男子体操団体金メダリストの加藤凌平さん(32)を任命した。3人は同市出身で、「故郷のイメージアップに一役買いたい」と抱負を述べた。

委嘱式は11日、市役所で行われ、山川百合子市長が、地場産業の皮革工業による名刺入れと、宣伝隊長の名刺を手渡した。宣伝隊長はメディア出演などを通じて、市内の名所や見どころをPRする。

約25年市内で暮らした森

川口市立幸町小3年
かわむら えま
川村 笑麻 さん



戦争に関心を持つきっかけになった本を手にする川村さん(19日、川口市で)

戦争語り継ぐため執筆

受賞に驚きつつ、「平和の大切さが世の中に届けられたい」と笑顔を見せた。小学1年の時、「原爆の子の像」のモデルになった佐々木禎子さんを描いた絵本「おつづるの旅」に出会い、平和について考えるようになったという。

2年の夏に広島市の平和記念資料館を訪れた。展示の内容に衝撃を受けたが、「ちゃんと向き合わなければ」と食いつまみながら、胸に、これからは平和を考へ、伝え続けるつもりだ。

将来は外国人観光客に英語で平和を伝えるガイドになりたいと話す。「戦争を遠い時代の出来事にしてはいけない」。素直な思いを胸に、これからも平和を考へ、伝え続けるつもりだ。

平和への思い

私は本を読んで戦争に興味を持ち、広島平和記念資料館を訪れた。黒い雨を飲む人たちが皮ふがただれた人たちの絵を見て、原爆が「普通」の生活を一瞬でうばっていく恐ろしさに、絵の前で立ち止まってしまった。「原爆の子の像」に百羽の折り鶴を奉納し、平和を祈って手を合わせた。

その後、おじいちゃんから軍医だったひいおじいちゃんの話聞いた。ひいおじいちゃんは行軍中にお寺で助けられ、ソ連軍の攻撃から生きのび、終戦後はシベリアでつらい労働をして帰国した。ひいおじいちゃんがいれば、おじいちゃんはいないし、お母さんも生まれていなかったと思うと本当によかった。

戦争は、人の命や家族の生活をうばう恐ろしいものだ。今も世界では戦争が続き、悲しい思いをしている人がいる。戦争の歴史を伝え、平和への思いを受け継いでいくことが大切だ。

開智小4年
くしがみ きこ
串上 葵子 さん



父親の入院と家族の絆をつづった串上さん(20日、さいたま市岩槻区で)

父入院 家族で乗り越え

父親が入院している間の不安やつらい経験、そして学んだことを忘れないために執筆した。受賞の知らせに「お父さんへの良いサプライズになった」と笑顔を見せる。

作文は「今までの出来事を書いた日記みたいなの」。当時の気持ちを思い出しながら、家族の状況や絆を鮮明に書き込んだ。母親からアドバイスをもらい「自信作」を完成させた。明るく優しい父親の入院はつらい出来事だったが、家族全員で励まし合い、困難を乗り越えた。現在、父親は退院し、一緒に生活している。「いろんなことをしゃべったり、家族でご飯を食べたりするのが幸せ」と話し、父親と一緒に過ごす日々をかみ締める。

父親の入院をきっかけに「命を救う仕事」を目指すようになった。そのため体の仕組みや病気について勉強したいと考えている。

私の家族は「ワンチーム」

1月、お父さんが突然体調を崩し、入院することになった。お父さんのいない家は静かだった。

私は学校に行けなくなった。理由は分からないが、朝になると体が重くなった。お父さんは、入院をして1か月以上たってから目を覚ました。2月のバレンタインデーは、チョコを食べられないお父さんのため、紙粘土で作ったお菓子を病院に持っていた。その日、お父さんは入院後、初めて立つことができ

家族みんなが毎日、面会に行った。私の家族は「ワンチーム」だ。お父さんが入院することになって悲しかったが、目の前にお父さんがいなくても家族はいつもつながっている。

お父さんはリハビリを頑張り、退院して家に戻ってきた。私も学校に行けるようになった。私はまだ小学生だがチームの一員だ。家族が困っている時、助けられるようにしたい。

馬との交流 詳細に描く

馬の牧場の乗馬キャンプには、3歳の時から年に2〜3回のペースで通う。小学生まではポニーだったが、今ではサラブレッドにまたがれるようになった。

受賞作は夏休みの課題で、「馬との交流の素晴らしさを少しでも伝えたい」と、キャンプで馬や仲間たちと向き合った濃密な時間を詳細につづった。

文章を書くのは得意ではないが、「好きな馬のことなら」と書き始めると、思

馬の賢さや豊かな感情、キャンプ仲間との交流の意気込み、原稿用紙に向き合うと、馬との長い付き合いの中で学んできたことに気が付いたという。

楽しいと思ったこと、素晴らしいと思ったことを周囲の人たちに伝えるために、「これからも作文を書いていきたい」と意気込んだ。

この夏で学んだこと

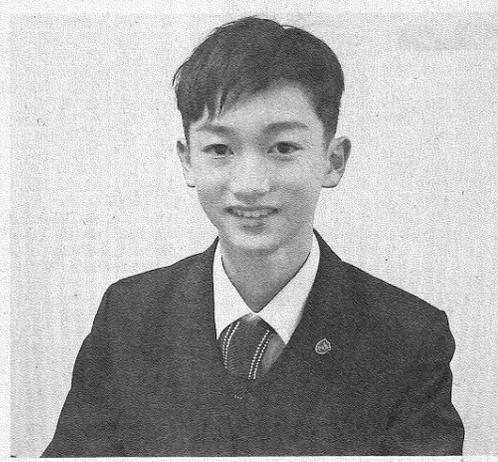
牧場は、馬に乗るだけでなく人の心を映し出す場でもある。この夏に参加した10日間の乗馬キャンプは、かけがえのない体験になった。

エサやりや馬房の掃除を通してキャンプ仲間とつながりを深めた。「準備」の大切さも学んだ。馬具をそろえ、馬の体調を観察することが馬との信頼関係を築き、事故防止にもつながる。「準備」は単なる「段取り」ではなく、心と心をつなぐ大切な儀式だと

考えるようになった。

馬は、耳や目などの仕草を通じて気持ちを伝えてくれる。手綱を強く引きすぎると馬は痛みを感じ、やめてほしいとサインを出す。言葉を持つ人間同士でも相手のサインを見逃し自分の都合だけで判断してしまうこともある。相手を観察し「声」をくみ取ることが大切だ。乗馬キャンプでの経験は、これからの人生に役立つと思っている。

開智所沢中等教育学校2年(中学2年)
もりわけ あさひ
守分 朝日 君



「楽しかったこと、伝えたいことを書いていきたい」と語る守分君(20日、所沢市で)